や、八十路の坂をも越へたるにやあらん、見るから、あはれなる翁の、眼もかすみ、耳もとほく、膝もふるいて、足元も定まらずなりたるが、我手さへ、思ふがまゝに、動かぬかなしさには、やう〳〵、向ふ朝夕の食卓に、あるは汁をかへしては、衣を汚し、或は飯を落しては、あたりに打ちゝらすきたなさを、子は眉をひそめて、あらずもがなと思ふけしき、嫁は口ぎたなくのゝしりて、いひこらすに、翁は、何の答も得せずたゞ、ぽろ〳〵と涙をこぼすのみ。はては、茶碗にては、壞るゝ憂のあればとて、さなきだに、きたなげなる粗造の碗の、椽さへ、所々かけ落ちたるを用ひさせ同じ食卓にては、うるさしとて、勝手の隅に逐ひやりて食事させけり。

ある日、翁、幼なき孫の小さき木片もて餘念もなく遊び戯れ居るを見て、問ふ樣、「やよ、子よ、何して遊べるぞ」「大人となりたる時、父上、母上に食を參らせんために碗を造り侍り」別心なき幼兒の答、いかに、夫婦の胸に、ひゞきけん、二人は顏を見合せて、暫しは物も言ひ得ざりしが、やがてがばと、翁の前にひれふして、等しく聲をあげて打泣き、今迄の不幸を詫びぬ。

其日よりは、麗はしき食器にて食を捧げ、同じ食卓にていたはりかしづき、朝夕、敬ひ仕へけりとぞ。

愛らしき幼兒

羽田　晴子

世のなかに、ありとあらゆる行爲のうちにて、幼兒のなすことほど、罪なく、愛らしきものは、あらじ。己、性來、幼兒を愛し、なほ、幼兒の群にありし時にも、歳下の子どもをあつめては、ともに、遊ぶことを、よろこべりしが、今、はた、朝な夕な、幼兒とともに、

たのしき日月を送ることを、動とせる身となりしも、思へば、深きよしあることにやあらむ。

嘗て、幼稚園にて、あまたの幼兒どもを集めて、ある手技を、教へつゝありしに、不意に、參觀人、あまた、入りきたりて、幼兒どもの注意の、みだされたるに、未練の己、心に、たてし案も、うらうえとなり、時しも、夏のなかばのあつさ、たえがたかりければ、滿面、汗にまみれつゝ、やうやく、業をなし終へて、庭の遊に伴ひいでたるに、一女兒、己の側にきたりて、手をとり、不圖、己の面を見て『おや、先生あついのでしよう』といひながら、自分の汗ふきをとりいだし、ぬぐはんとして、のび上るに、己も、腰をかゞめて、ぬぐひもらひぬ。このときの心地は、ことばにも、つくされず、何も知らざる兒の小さき胸にも、かゝるまごゝろは、あるものよと、怪しきまで、可愛き思に、胸をうたれ、はや、目には涙を止めあえざりしかど、見とがめらんも、詮なしと、いそぎ、他の遊びにと、導きたり。

かくて、月日は、夢の如くに、すぎさりて、かの女兒は、學校に入り、己は他に、うつりて、相遇ざること、二年ばかりの後、たま〳〵道にて相見しに、あまりたけ延びて、大人びたるに、心もつかず、彼方より禮をなしゝに、たゞ、何の氣もなく、答禮のみして、うち過ぎければ、いと、はしたなげに、見えたり。あとにて、其子なりけりと思ひいでゝ、いとほしさ、かぎりなかりけるに、二三日、すぎて、又出會たれば、其名をよび、ひきとめて、いろ〳〵のはなしなどせしに、しばしは、我そでに、すがり、離れんともせざりしかど、己にも用事あり、兒にも、時間の後れやせんと、心遣して、さとし歸らしめたり。それより、後は、

己を見るごとに、必ず、はせきたりて、袖に、すがりぬ。幼兒ながらも、溫き心、掬するに、あまりあり。かかる兒の母たる人、師たらん人は、いかに、樂しく、いかに、うれしからむ。

あはれ、この姿、このこゝろ、正しき自然に從ひて、ゆく〳〵教へ導かれなば、生長の後には、いかに、めでたき實を結ぶらむ。

母と子のをしへといへる文のはしにしるすべき歌をと清水君のこひたまへるに

中島歌子

うつくしくまなひの庭に咲にけり
　母のをしへのなてしこのはな

風前雪　竹屋つね子

村からす寢くらにかへるこえ絶て
　ふゝきにくるゝ遠のひとむら

鳥　庭田長子

おそろしき爪もつわしも子を思ふ
　こゝろの闇になきあかすらん

催雪　中村禮子

雨になりみそれになりて昨日今日
　くもるや雪のしるしなるらん

遠樹紅　田中みの子

むらからす寢にゆく岡の森かけに
　のこる夕日はもみちなりけり

竹間霰　箕作光子

むらすゝめねくらさためし竹村に
　こゝろなくふる玉あられかな

雪中遠情　磯部つや子

所せきにはもけしきをそへてけり